

愛の軌跡

黒色狼

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

緑のふわっとした女の子と、男の子のイチヤイチャが書きたい（願望）

基本的に1話完結の短編となります。

イチヤイチャを書きたいだけなので基本的に短編という事もあり時系列は適当、サラッと流して下さい。逆に時系列がしっかりしたお話は何処かに繋がるお話となっております。

シリーズ全てプレイ済み（記憶がはつきりしてるとは言ってない）

目次

| | |
|------------|----|
| ちゅーとりある | 1 |
| なれそめ | 5 |
| いもうと | 12 |
| ていいち | 19 |
| おでかけ1 | 23 |
| おでかけ2 | 27 |
| くろれきし | 32 |
| とくべつえんしゅー1 | 38 |
| とくべつえんしゅー2 | 43 |

ちゅーとりある

「貴方は……私を責めないんですか？ 貴方が望むならお金も、身体も、命も……全て差し上げます。どうです？ こう見えて私着痩せするんですよ？」

「……」

「何故ですか……私は、私は……貴方に死ねって言ってるんですよ!？」

「ばっかだなあお前は」
「!? 私はずっと悩んで苦しんでっ！それでも選択して……なのに貴方はそうやって何で笑ってられるんですか！ カイさん！」

少し時間を遡りパンタグリユエル内部。

「それが……千の陽炎」

「はい。そしてこの作戦の要、カイさんをお願いしようと思っ
ています」

その場にいる全員の視線がカイへと注がれる。しかし本人は腕を

組み目を閉じてなんの反応も示さない。

「今言った千の陽炎の作戦はいわゆる保険です、本当の要はカイさん。貴方です。貴方の平行世界から斬撃を呼び出す力は凡そ限界はないと聞いています。一気に何千何万という飛行艇をエンジンだけを狙って斬り落とすのは可能ですか？」

本当にそんな事が可能なのか、皆が半信半疑でカイを見る中VII組の皆は何処か不安そうである。重い沈黙が支配する中カイは告げる。

「……ああ、可能だな。目に見える、俺が距離を把握出来ている場所であれば何処でも斬れる。執行者レベルの相手が複数妨害に攻めて来ない限りはな」

「ではカイさん。この一世一代の世界を守るための作戦に参加して貰えますか？」

「ああ。いいぜ、やってやるよ」

「ちよ、ちよつとカイ！それだったら貴方が……」

「ああ、十中八九死ぬだろうな。けどこの世界を丸々守れるのと俺一人の命、どっちが守るべきなのかユウナ。お前だって分かるだろ？」

別世界から斬撃を呼び出す。それがカイ フリークスには可能だった。凡そ人間が出来る芸当ではないソレはもちろん真つ当な技術でも能力でもない。偶然の、神の悪戯で授かったその才能は何の対価も無しで使えるものではなかった。使えば使うほど身体を蝕み最終的に命を落とす、そういう代物だ。現に1年前は普通に見えていた目も今では右目は何も見えず、少しでも心臓に負担掛ければ咳き込み血を吐くほど身体は弱っている。どれも斬撃を別世界から呼び寄せた結果だ。

今ももう1人の自分が己の中で暴れているのが分かる。もう自分が自分でいられる時間も。どれだけ生きていられるかも本人ですら分からない。けど何となくもう長くないのは薄らと感じていた。

「カイ、お前はそうやってまた……」

「リイン教官にだけは言われたくないですね。俺はやると言ったらやりますよ、というよりもし仮に戦争になったらですよ。それとも灰色の騎士様はこの戦争を止める気がないんですか？ほらお前らもしんみりした顔すんじゃない。戦争を俺らが止めるんだろ？じゃあなんの問題もねえじゃん」

「でも……」

「でももへつたくれもないだろ。ずっとその為に戦って必死に道を模索してきたんならとことん足掻こうや」

結局カイの言っていた事は正論で仮に戦争が始まればカイが命を張る事になるがそうなる前に止めればいい。その道を自分達は探して来たのだ、今更何も恐ることはない。

そうして纏まってミュゼが少し話があるとカイを呼び出して今に至る。未だに千の陽炎についての話は続いているがどうしてもミュゼがカイを連れ戻した。

「お前がずっと悩んでたのはこれだったんだな。安心しろ俺は死なねえよ」

「そんなボロボロの身体で言われても説得力がないですよ……」

ミュゼがカイを押し倒すとそのままカイはなんの抵抗もなく後ろにあるベッドへと倒れていく。もう同世代の女の子を押し返す程の力もカイには残されていない。痛みで呻きながらも優しく自分を抱き締めるように背中を手を回した彼の優しさにたまらずミュゼはカイの胸元に顔を埋める。

「ズルいです、ズルいですよお……」

「悪いな……」

「絶対に許しませんっ、ん」

貪るようにミュゼはカイの唇へと食い付いた。ずっと逃げ続けていたカイも今日は大人しくミュゼを受け入れていた。最初のキスは甘酸っぱいものと良く耳にするがどれだけ唇を触れ合わせて、舌を絡み合わせても涙の味しかない。

唇が離れると2人の間につーつと銀の架け橋が出来上がる。

「俺は嘘は付かない。お前が悩んで苦しんでその上で出した答えなら俺は受け入れる。そして必ずお前の元に帰ってくるさ」

「嘘です、嘘ですっ！貴方は軽々しく私の内側に入ってきて掻き乱すだけ掻き乱して何処かに行ってしまう。いつもそうです、私の気持ちも思いも全部盗んでいって気が付いているのにいつもとぼけて……非難もせず私を犯しもせず、こんなことなら私はあなたに……」

そこまで言いかけて塞ぐようにカイが唇を合わせてくる。弱々しいカイを振りほどくなんて簡単なのにどうしても振りほどけず、ミュゼはされるがままに口内を蹂躪される。いつも追い掛けても気が付いたら逃げ出してしまう彼がこんなにも自分を求めてくれている。そうやって簡単に自分の内側に入ってきて求めているものを与えてくれるカイは本当にズルい。

「非情に徹しきれないで俺から逃げたいのなら勝手に逃げればいい。けどお前は俺の惚れた女だ、欲しいものは何が何でも手に入れるタチでな。お前がどれだけ逃げようと俺は何処までも追い掛けてお前を手に入れる」

「けど私は……」

「でももへったくれもねえよ。ていうかお前の事情なんてしつたこつちやねえ。お前が嫌だと泣いて叫ぼうが俺はお前を手に入れる。お前が愛した男はそんな男だ。どうだ？幻滅したか？」

「ばかあ、ばかあーそんなわけない……大好きです！」

もう一度合わせた唇はもう涙の味はしなかった。

なれそめ

VII組は他のクラスと比べ人数が少なく基本的にどの授業も全て他のクラスと合同で受ける事になっている。決して多くない生徒数である第2分校生の全員の顔を把握するまでに時間は掛からず世間知らずである俺でも簡単に溶け込む事が出来た。

いかせんずっと外の世界との交流を断っていた俺にとって第2分校での生活や勉強、うん。特に勉強とか皆にフォーローされながら何とか過ごしている。正直入学出来たのはお母さん直伝の丸暗記術のお陰だし、帝国の歴史なんかはもうてんでダメだ。自分のクラスの教官であるリイン教官には申し訳がほんとに意味わからん。ドライカレー卿ってなんだよ、どんだけカレー好きなんだよ。って言ったらすげえアルティナにため息をつかれたんだが。お兄ちゃんはシヨックです。

まあそんな訳で勉強の方は四苦八苦しているが第2分校での生活は新鮮で楽しい。ぶーるだとかてにすだとか未知なるスポーツというものにも遭遇し柄にもなく入学当初はテンション上がりまくってたな。そんな世間知らずの俺に同じ第2分校生は色々な事を教えてくれた。まずアッシュ カーバイドというちよいちヤライ見た目をしているが誰が見てもイケメンな長身の男子。あいつには最近色々な事を教えて貰っている。

一時期俺はアルティナとずっと一緒にいた為、まあアルティナが「私がお兄ちゃんをリードしてあげますっ！」とふんす、という感じに胸を張ってたから着いて行っていた訳だがそのせいで俺のロリコン疑惑が浮上した。由々しき事態である。妹だと言い回しても信じて貰えず、まあ確かに血は繋がっていないが。女子に犯罪者を見るかのような目で見られ、俺は男子達に相談を持ち掛けた。俺はロリコンではない、無罪だと。

勿論最初は信じてはくれなかった。しかし長く女の子に対しての議論を繰り広げていくうちに俺は男子達皆と強固な絆を築けたと思う。やっぱり俺は清楚でパンストで巨乳だと思うんだ。

だがそれをアツシユは鼻で笑ったのだ。俺はそれを許せなかった。だから文句を言つてやろうとした訳だ。だがアイツは

「ハッ、ちつちえ世界で満足してんじゃねえぞお坊ちゃんよ。世の中金さえ払えば女は抱けるしもつとすげえもんがそこにはある。知りたくねえか？」

俺はそれを聞いて即墮ちした。清楚パンスト巨乳以上のモノがこの世に存在しているのかという事実、そしてお金を払えば女の子を好き勝手出来るお店がこの世に存在するということ。なんということか、俺が見ている世界はなんてちつぽけだったんだ。それから俺はアツシユと親友になった。いや師匠、一生ついて行きます。

まあそんな感じで俺の生活は充分している。じゃあ不満はないのかって？

いやある。もう泣いて土下座したいぐらいにお願いしたい事がある。

まず1つ目。分校長が襲ってくる。

ちよつと待つて欲しい。聞いてられんわ、と席を立つのは待つて欲しい。俺は刃渡り25センチ程度のナイフ、そして刃を潰した刀を武器にしようしている。それを聞いて気が付いた人もいるだろう。正直俺は自分の腕に自信が無い。だが何故だか入学式に分校長に目を付けられちゃった。理由？知らんわ俺が聞きたい(キレ気味)

入学式じゃギラギラとした捕食者の目で俺を見てくるし挙句には子要塞で俺にしか分からない様に斬撃飛ばしてくるしもうほんと辞めて欲しい。ほんと、辞めて欲しい(2回目)

陰湿な嫌がらせをしてくるもんだから俺は分校長の剣を真つ二つにしてやった反省はしていない。そしたらあろう事か分校長は腹を抑えて狂ったように笑いだした。いやもう……怖いよ。そこから地

獄が始まった。もう斬撃飛ばすとか可愛いつて思えるぐらい普通に斬りかかってくる。それを回避して俺のいた場所見ると地震でもあったのかな？つてぐらい地面がパツクリと割れているんだ。ねえ、それ人間に向けていいの？俺生徒だよ？死んじゃうじゃん。人間最終兵器オーレリア分校長はどうやら俺をなきものにしたらしい。あとあの黄金の鬨気なんなの？アーツ無効化されんだけど。サ○ヤ人なの？幾ら美人でもこの過剰なアプローチはご遠慮願いたい。いや切実にやめてくださいお願いします。

2つ目、笑えよ。まだあるんだぜ？

同じクラスの美少年。腐女子歓喜のクルト ヴァンダール君にすげえ嫌われてる。最初は別にそうでもなかったんだ。胡散臭えなこいつぐらいなもんだつたと思う。

ある日俺は朝早くに起きて日課である鍛錬を行っていた。まあ昔からずっと続けてるもんだからやらないと落ち着かないんだよ。したらクルトも朝の鍛錬を日課にしていたみたいでぱったり出くわしたんだ。俺は少し変則的だがお互いに二刀流使いつて訳で何か感じるもんがあったんだろう。かるーく手合わせをした訳だよ。まあ俺如きが敵うはずも無く一方的に攻められて防戦一方。しかし俺は防御、攻撃を喰らわれないことに関しては自信を持ってそれなりだと断言出来る。じゃなきや俺今頃分校長に真つ二つにされてるからマジで。これも何でも燃やすマンとお母さんやポンコツのサンドバッグになっていたお陰かもな（遠い目）

防戦一方だった訳だが俺は流れる様な美しい受け流しでクルトの背後を取ったんだ。ふつ、我ながら惚れ惚れするぜ。だが攻撃はしない。何故かって？そりや攻撃したら痛いじゃん？したらクルトがキレてどっかにいった。うん、突然キレてどっかにいったんだ。大丈夫だ。俺も意味が分からない。それをリイン教官に相談すると神妙な顔をされた。うん。良くわからん。リイン教官には手加減し過ぎるなどは言われたが手加減なんぞしてない。確かにお母さんとか分校長と比べると生温いのは確かだが比べる相手が人間じゃないか

ら……

そんな訳で悩みもあるが充分した毎日を送っている。あ、因みに部活は文芸部に所属しているぞ。本読むのは好きだからな。

トールズ士官学院第2分校の放課後は皆が部活動に参加している。その参加率は100%、普通なら驚異的な数字であるが部活動に参加しない生徒はオーレリア分校長の小間使いになる事が確約されていたのもあり全員が部活動に真面目に取り組んでいる。

カイ フリークスも例外ではない。元より本を読むのを嫌いではなかった彼は文芸部に所属している。親友のアツシユもそこに所属しているのだが彼は今分校の屋上にいた。理由は簡単。アツシユがもう1人の部員であるタチアナ、女子といい感じだからだ。俺邪魔じゃね？と空気が読める男は華麗に去るのさ、とキラんと光る笑顔（本人から見ても）で教室を出るのは毎度の事である。それにカイ本人屋上という場所を気に入っているのもある。日によって違う風景、自然を感じさせてくれる屋上。時たま本を読むのも忘れててぼーっと夕焼けを眺めてしまう事もしばしば。今日もそうやって景色を眺めていた時だ。

「……そこにいるんだろ？出てこいよ」

「見つかってしまいましたね」

校舎の影から出てきたのは区組主計科で見た事がある顔だった。緑の比較的短く切りそろえられたふわっとしたボブカット。いつもニコニコとっていて何処かあざとい女の子。

「確か……ミュゼ イーグレットだったか」

「正解です。良く覚えてくれていましたね」

「そりゃな。生徒数も多くねえし同じ教室で授業を受けているんだからな。それに……そんな貼り付けた様な笑顔と人を人として見ない視線がとてつもなく印象的でな」

「ふふっ、何のことでしょう」

一瞬仮面が揺らいだのをカイは見逃さない。だがそれもほんの一瞬の事で大した狸っぷりだ。確かにカイは生徒全員の顔と名前を覚えていて、その中でミュゼの存在はとても異質なものだった。仮面を被り何処か人を駒のように見ている視線、ミュゼという人物の底知れぬ何かをカイは感じ取っていた。

「とぼけるなよ。お前頻繁に俺の事見てるだろ？正直その視線は不愉快だからやめろ」

「こんな可愛い女の子の熱い視線を……」

「あー、そういうのいいから。お前が猫被ってんの分かってるから」

いやん、いやんというふうな身体をくねらせものを言うミュゼに上から被せるように言葉を投げつける。その瞬間にカイの姿がブレた、そう認識した時には既に遅くはっとなって気が付いた時にはミュゼの目の前にカイがいた。突然の事に後ずさろうとするが後ろには壁がありそこにぶつかってしまう。

これは不味い。明らかに見た目不機嫌な目の前のオーレリアすら敵わないと言わしめたある曰く付きの組織に囲われていた彼が何をしても不思議ではない。どれだけ調べても一時期帝国の情報局に極秘裏に客として出向いていた事ぐらいしか分かっていない。

幾ら何処までも大人びていて驚異的な演算能力を持つていてもミュゼもただの1人間でありただの少女。向かってくる明確な驚異、壁に追い込まれた心理的な恐怖に仮面が崩れているのを自覚するがもうそれを取り繕う余裕すらない。あたふたし泣きそうになった所で。ペシン、とデコピンが炸裂し割と大きめの音が響いた。

「あう」

「何泣きそうな顔してんだよ。何時もの澄ました仮面はどこいったんだ」

「だ、だって……うう……」

ミュゼは気がついた。今自分は壁際で追い詰められていてカイはそんな自分を覆うようにして壁に手を付いている。これは「壁ドン」というものではないのか？仮面を被っている時であれば「いやんっ、カイさんったら大胆ですわっ♡」ぐらい言ってるのだが仮面はズタズタに壊され自分も思ったより動揺しているらしく取り繕えない。それどころか顔が熱い。自分から押搦うように迫ることならまだしもこうも男らしく大胆に迫られ自慢の演算能力はパンク。顔を赤くし俯くミュゼは年相応だった。

「発言的にビッチなのかと思ったが、なんだただのなんちゃってビッチか」

「びっ?!ビッチじゃないです!」

「だからそう言ってるだろ?えんこう?ってのをやってるのかと思っ
てな。金払えばやらしてくれるやつ」

「なななっ、そんなことやってません!」

「わーった、わーったよ。だから叩くな痛てえから」

はあはあと肩で息をしながら赤くなった顔でカイを睨めつけてやる。なんて失礼な男なのだろうか。ヘラヘラと笑ってビツチだの援交だの失礼極まりない奴だ。ミュゼだって歳頃の女の子でどちらかと言えば自分の育ちは良い方だしロマンチックな恋愛に憧れていないことも無い。

未だにニヤツと笑ってこっちを見ている男をキツと睨めつけるがまるで気にしている様子はない。何だかそれが悔しくて堪らない。自分はこんなにもかき乱されているというのに。

「なんだ、ちゃんと仮面外せんじゃねえか」

「へ？」

「普段の気持ち悪いほど出来上がった仮面何かより今のお前のが俺は好きだぞ。素のお前なら素直に可愛いって思えるしな」

ぽかん、と暫く惚けていたミュゼだが言葉の意味が少しづつ理解しについて元に戻りつつあった顔を再び赤くしていった。

そんな反応に満足したのか、それとも普通に気が付いてないのか。じゃあな。とカイは後ろを向きながらひらひらと手を振りその場を後にした。誰もいなくなった屋上でミュゼはぺたんと力なくその場に女の子座りで座り込む。

「もう……なんなんですか」

夕日に照らされた少女の顔は夕日に照らされたにしては少し赤かった。

いもうと

「正直さあ、ユウナとどこまでいつてるんよ？クルト君」

「なんなんだ君は、藪から棒に……それに質問の意味が分からないぞ」

「いやなに？お前の事だからなんの期待もしてなかったけどそりやねえんじゃないか。俺がユウナならぶっ飛ばしてるね」

「……時々思うが君はエスパーか何かなのか？」

「え、マジで殴られたの？」

「ああ。まるで意味が分からない」

「俺はお前がそれに気が付かないのが意味わからんわ。絶対喧嘩うつてるよね？買うよ、超高めで買うよ？あーっ！教官は言わずもがなでアツシユもあれで同じ部活の子と良い感じだし、俺の癒しはもうアルティナしかないない」

「呼びましたか？」

ひよいっとソファの向こう側から首を傾げるアルティナはどうやらお風呂上がりのようなのでほんのりと赤くなつた頬にまだ少し湿っているのか白く透き通つた髪の毛の先から水滴が落ちている。

「呼んだ、超呼んだ。聞いてくれよ、コイツまたユウナに殴られたらしい。どうせまた自業自得だろうけどな」

「馬鹿言うな。僕はユウナが勉強を教えて欲しいと言うから見ていたというのに、少し席を外して戻って来たらあろう事か僕のベッドで枕に顔を埋めながら寝てたんだぞ」

「あー、うん。そりゃユウナが悪いわ。ほんとどんまいユウナ」

だろう？とそれを皮切りにつらつらとユウナへの文句を吐き出していく。と言つても聞いている方からすれば惚気けにしか聞こえないのだが。

またかよと、遠い目をしながらソウダネーツライネーと相槌を打つだけの機械となる。するとふわつと甘くて女の子特有の香りがして振り返るとそこにはアルティナが隣に座っていた。

少し拗ねているのか口を尖らせ何処かモノ欲しげに見上げてくるアルティナはおもむろに自分の首に掛けてあるタオルを首から取る。そこでああ、なるほど。と自然と口元が綻ぶ。

「髪まだ濡れてるな、ほれタオル貸してみろ。拭いてやるから」

「はい。よろしくお願いします」

アルティナからタオルを受け取ると優しく包み込むようにして髪を拭いてやる。昔まだ外に出してもらえなかった頃、アルティナより小さい猫の様に妹の様な女の子の髪も同じように吹いてやったものだ。そういえばその子も髪を吹いて欲しいのに気が付いてやれなかった時や、他の人と話をしていこうとして近くに擦り寄って来たものだ。

まあそれが愛らしくて可愛らしいものだからつい甘やかしてしま
うのだが。

「何だか不埒な気配がします」

「ばつきやろう。あつても妹みたいなもんで可愛いなーって思うぐら
いだ。ほれ、ドライヤー使いに洗面台に行くぞ。わりいなクルト、ん
じやな」

「本当に君たちはいっつ見ても本当の兄妹みたいだな……」

じとーつとジト目を向けて来るアルティナ。しかし髪を吹いて欲
しいのに構ってもらえなくて擦り寄ってくるという彼的には妹ポイ
ントが高過ぎる事をしてきたアルティナが可愛らし過ぎて堪らなく、

そんなジト目ですら撫で回してやりたい気分なのだ。取り敢えず可愛いという言葉で少しご機嫌を取りに行く、ぷいっと顔を逸らされてしまったがこれも一種の照れ隠しだ。

「ん、仕方がないので許してあげます。お兄ちゃん」

「そりゃ優しいことで。まあ不埒なのは教官みたいな人を言うんだ、そこは間違えたら駄目だぞ」

「そうですね。確かにリイン教官は不埒です、良く旧VII組の女性方に抱き着かれていますし」

それは弁明のしようがない事実でもあった。何処かで待ってくれ、俺の言い分も言わせてくれっ！と近い内に髪が白に染まり厨二病乙な見た目になる教官の叫びが聞こえてこない事も無いかもしれない。

そんな他愛もない話して洗面台に着くと見慣れた緑色の髪が見えた。嫌な予感がする。くるっと回れ右をする彼にアルティナは首を傾げるが洗面台の方を見てああ、とひとり納得した様子。

だが少し遅かったようだがしり、と腕を誰かに掴まれた。アルティナのものとも違うもつと女を感じさせる匂いがする。そして何より腕に感じる柔らかい、男なら誰しも1度はその手で驚掴みにしたいモノが当たっているに確実にアルティナではない。

「くそっ、殺せっ！」

「何でそんな満更でもないけどお前のだから複雑だわけでもつとやれ、みたいな顔してるんですか？」

「俺はさ。ほんとお前のことエスパーだと思うわ」

「ふふっ。相思相愛ですねっ♪それでも見掛けたらすぐに逃げようとするのはちよつと酷いんじゃないですか？私悲しいです」

しくしくと手で目を覆い泣いて見せる女、ミュゼ。正直に言うとは彼女が若干苦手だ。と言っても別に嫌いという訳ではないし寧ろ可愛い女の子ならばちよつこいなのだがどうもミュゼに底知れないな

にかを感じている身からすればその甘くて魅力的な誘いに乗ってしまつては良いのだろうかというある意味理性とも、人間の防衛本能のようなものがそうはさせない。

「むう、おに……カイさん」

「おうおう。いつもの様にお兄ちゃんって呼んでくれてもいいん……ごめん悪かったってだからクラウⅡソラスしまつて？俺死んじやうからお願ひします」

ぷるぷると震え見るからに赤くなつた頬を膨らませクラウⅡソラスを呼び出したアルティナに開幕土下座、とはいかないが速攻で謝り倒す。妹をからかったら割と洒落にならないお返しが飛んでくる事がしばしばある。

そしてそんな光景を見ても「あらあらうふふ」とニコニコとしているミュゼに助けろやとアイコンタクト。だがしかしミュゼ印のニコニコ笑顔は微動だにしない。要は自分でどうにかしろということなのだろう。

「……まあ今日は許してあげます」

「お、おう。ありがとな……」

「本当に仲がいいですね。さつきも一緒にお風呂に入ったというのに私を置いて直ぐに出て行ってしまったんですもの。妬けちやいますね」

え、マジで？と目線でミュゼに問い掛ける。ニコニコと首を縦に振るのを見てから次はアルティナを見る。あ、すげえ震えてるわこれマジなやつだわ。とそんな可愛らしい行動をしでかしてくれた妹分を後ろから優しく抱き締め頭を撫でてやる。

「このこのく、可愛いやつめく」

「うう……」

その後髪の毛を乾かしてやってから凄い撫でくりまわした。やり過ぎて結局クラウソラスでしばかれた。

「つてえ……まあこれも愛されてるが為って思えば……いやそれでもちよつと痛いわ」

「自業自得ですよ」

「はあ、お前がアルティナを煽ったりするからだろ。それでもあれか、さつきみたいに妬けたからとか抜かすんじゃないや……まあそんなたまじゃねえか」

「そうですよ？」

「は？」

「私嘘は一つも言ってます。アルティナさんに妬けていました、嫉妬してました」

いつもどこかふわつと薄っぺらく聞こえてくる言葉も今は凜としてはつきりと聞こえてくる。アルティナが彼を張り倒して直ぐに彼の部屋に2人揃って移動していた。そんなミュゼのいつもとは違う音色が部屋に響いて嫌でも彼女がいかに本気なのかを理解させられる。

彼女は本気だ。いつもの貼り付けた仮面のような笑顔も、まるで人を駒のように見定めるかのような目も。この時は真っ直ぐと彼自身

を見詰めて離さない。ぎゅつと手を握られる。ベッドの端から端まであったお互いの距離も気が付けば肩が触れ合う程近くになっている。いつの間に、とは思わない。きつと馬鹿みたいに面をくらつてる間に近付いて来たのだろう。

ぎゅつと握られた手はまるで繊細なものを握っているかのように弱々しく震えている。

「好きでもない人に身体を触らせたりさせません。好きでもない人と夜に2人きりの部屋に入ったりしません。好きでもない人に弱い私を見せたりしません。それでも貴方はまだ誤魔化しますか？まだ、まだ私を避けるのですか？」

「……………」

これじゃ教官の事も言えないな、と思う。いや自分の場合は気が付いていたのにずっと知らん顔し続けたのだからもつと最低だ。依然としてミュゼの手は震えている、分かっている。分かっているのだが。女の子がここまで勇気を振り絞っているのだ、腹を括るしかあるまい。

「分かった、降参だ」

「!?じゃあー!」

「ああ。お前とは付き合えない、これでいいか？」

「っ!?理由を聞いてもいいですか？」

「理由も何も罰ゲームなんだろう？」

「へ？」

「いやあ、幾ら性格悪くてもお前可愛いもんな。そんな奴に俺が告白される訳ないじゃん。あれだろ？アツシユに聞いたことあるわ、罰ゲームで告白させられるやつだろこれ。けど手が震えるぐらい嫌とかちよつとシヨックだわ」

「カイさんのばかあ！」

「おぶぶぶっ！」

その次の日の朝愉快なオブジェクトがカイ フリークスの部屋で
出来上がっていたという。

ていいいち

最近また悩み事が増えたんだ。笑えよ……。別に分校長が遂にクラフト所かSクラフト使ってきて目が死んできたとかそういうのではない。ていうかなんなの？あの地面からめつき剣生えてくるやつ？馬鹿なの？アホなの？殺すの？ああ、元からそのつもりで。そっかあもう何でもいいや（諦めの境地）

話が逸れてしまった。まあ勿論分校長の殺人未遂事件も深刻な悩み事なのだが今回俺が言っている問題とは別問題だ。というかももう分校長は諦めたよ。やっぱ人間にしか言葉って通じないんだよ、うん。

「どうかしたんですか？」

「いや……もういいや。何でもねえよ」

「変なカイさんですね」

ふふっ、と笑うエセ緑。素で笑うなときめいちやうだろ。そうだよ。あの日から俺にかわいー（棒読み）ストーカーが出来ました。いや大丈夫だ、俺は正気だ。今までは誰も気が付かない距離でチラチラと盗み見る程度だったが今はもう俺の斜め後ろにキツチリと付いてきている。いやね、これでもめっちゃ粘ったんですよ。最初なんか直ぐ隣に来て腕を取ろうとしてきやがったんだ。くそっ、なんちやつてビッチかと思っていたがコイツまさか本当にビッチなんじゃないのか？

だが俺は騙されないぞ。お母さんにも言われているからな、女の子は皆誰しもが狼だつて。だから簡単に信じてはいけない。奴は俺の社会的地位を陥れ逆らえないようにして喰い散らかすつもりなんだ

(被害妄想)

このエセ緑に何を言っても無駄だと早々に諦めた俺は取り敢えず様子を見ることにした。そう、時には諦めも肝心なのさ。分校長の件のようにね(白目)

しかし相変わらずの狸っぷりでお手本のような笑顔をニコニコと浮かべるエセ緑だがたまーっに素の顔が出てくるようになった。例えば俺がアルティナと一緒にいる時だ。

流石に俺が他の人と会っている時は空気をよんでかきちんと前みたいに連れだと分からない程度までは距離を保ってくれている。いや、この前アツシユやリイン教官と話している時は普通に後ろに……いやほぼ隣にいたような。

まあそれは今は置いておこう。以前約束していたアイスを食べに行く約束を守る為にアルティナと共に俺は街に行ったんだ。アイスだけって約束だったんだがアルティナがパンケーキにちろちろと目移りしていてな。それを懸命に隠そうとしてるんだがバレバレで。それがまた可愛くて俺はパンケーキもアルティナに買ってやったんだ。「まあお兄ちゃんがそう言うのなら食べて上げてても良いですよ」とか言っていたがめっちゃ目がキラキラしてたよ、隠せてないぞ妹よ。そこが可愛くて堪らないんだがな。

そうそう、そうやって俺が全力でアルティナを愛でている時にだ。突然鋭い視線を感じて振り返るとエセ緑が変顔してこっちを見てるんだ。こう……仮面被ろうとして被れなくて変な感じになっていた。後でなんで変顔してたんだ？って聞いたら「してませんっ！」って顔を真っ赤にしてどっかに行った。情緒不安定かよ、女の子って怖い。それからもちよくちよく俺の嫌いな視線や仮面ではなく、鋭い視線や変顔をしている時がある。奴は一体何を企んでいるんだ(困惑)

トールズ士官学院第2分校の屋上。そこに同じベンチに腰掛けお互い本を読む男子がいる。普通の人であれば最初に疑うのはカッブルなのでは？と思う事だろう。実際に肩が触れ合いそうな程近い距離に腰掛けている2人を見てそう噂する者も少なくない。まあ男の方は頑なに否定するのに対して女の方はニコニコとして否定も肯定もしないのも相まってその噂は加速的に広がった。なんでやねん、と男の素のツツコミは無情にも無視された。世間の風は男には風当たりが強いのである。

一時期ロリコン疑惑で騒がれていたのも今ではそれは息を潜めなくなつていった。やつと誤解が解けた、という事でもある。

「…………お前さあ、楽しいか？」

「はい？」

「いや何処にでも付いてきて今もぼーっとしながら本読んだけなのに退屈しねえのかなあと」

「私は楽しいですよ。時々自分がよく分からなくなりますが…………やつぱり殿方の近くにいるとドキドキしてしまいますし」

「はあ…………まあ何でもいいけどよ」

カイもミュゼが隣にいるのがもう随分と慣れてしまっていた。本来ならこうして夕日に照らされながら共にベンチに腰掛けている状態にドキドキするのだろうが本性や底知れぬ何かを感じている身としてはそれよりも何を考えているのかよく分からず警戒が先に来ってしまう。それも最近は特に気にする事も無くなつて意識する事も無くなつたのだが。

相変わらずミュゼは胡散臭い。誰かと話している姿も、ニコニコと笑顔を振りまいている姿も。何処か薄っぺらく本質がそこにないように感じる。しかし最近は良く素の顔も見れるようになってきたの

も事実だ。まだ仮面が崩れてきている自覚がないのか変顔になる事が多々あるのだが本人は気が付いていない。

えいつ、と可愛らしい声と共にミュゼがカイの腕を取った。

「おい、何してんだ離れろ」

「くっ付いているんです。今は誰もいませんし大丈夫ですよ」

「……………」

「ふふっ、当ててるんですよ?」

「顔赤くするんなら最初から言うなよ」

「っ!?違いますっ!これは……夕日のせいなんですっ!」

ふんっ、とそっぽを向く。彼女は気付いているのだろうか。本人は仮面を被って色仕掛けを仕掛けているつもりだろうが仮面なんてもう既に外れていて素が出ている事を。

「普段からそうしてりやいいのに」

「何か言いましたか?」

「……………いいや、何もねえよ」

首を傾げて見上げるミュゼに不覚にもドキツとしたカイは柄にもなく視線を逸らす。ミュゼもなんのこっちゃや分かっていないのかしきりに首を傾げていた。

それからは会話もなく片方は本を読み、もう片方は腕を取ってチラチラと相手の表情を盗み見る。会話はなく黙りだが決してこの雰囲気はお互いに嫌いではなかった。

そんな2人をたまたま目撃した小柄の女性教官が女子しか居ない家庭科の時間に、それはもう可愛らしい女の子の顔をしていたんだよ。とニコニコと語り女生徒皆から質問攻めにあい顔を真っ赤にしてあたふたするミュゼの姿があつたとかかなかつたとか。

おでかけ1

「なあ、ミュゼ」

「なんででしょうか？カイさん」

「俺と付き合ってくれねえか？」

「え……………ええええええええええつ!？」

早朝朝早くに男女2人がリーブスの街を歩いている。リーブスは比較的小さい街だ、住んでいる人も少ないが皆とても親切で暖かである。

そんな小さい街だからか街の人達とは皆知り合いだと言っている。まるで微笑ましいものを見るかのようににこやかに会釈をしてくれる住人に男、カイ。フリークスは同じようにキツチリと会釈を返す。それに続くように会釈を返す女の子の方はというと何処か疲れているように見える。

(ええ、知っていましたとも。別にカイさんがそういう意味で言っていない事だなんて分かっていましたとも。はあ……………)

はあ、と心の声が漏れ出すように口から溜め息が出てしまう。別に期待してたとか残念だったとかそういう事ではない。ただひたすらにそういう風に捉えてしまつて自爆したのは自分なのだから。ただそう言われた時に真つ先に男女の関係を思い浮かべ、どのように盤面を動かすか考えていたこと全てちやぶ台返しされた気分だった。

事の真相は首都に行くけど自分は何も知らないから着いてきて欲しい。との事。不貞腐れて遠回しに他の人へ行けよと言つてしまったのだがどうやら最後の最後で仕方がなく自分に声を掛けたらしい。言いたいことは沢山あるが今は取り敢えず我慢することにしてついでに行く事となつた。

ここまで盤面が思つた通りに動かなかつた事なんてなかつた。これまで起きた事件の数々。内乱の結果。全ては自分の予想通りであつた。じゃあ何が盤面を狂わせているのか。考えるまでもなく目の前を歩いている男、カイ フリークスである。

出生や出で立ちには全て出鱈目で正真正銘謎の人物。調べて分かつたのは情報局に一時期厄介になつていたということだけだ。ここまですぐに分かつた事も幾つかある。

まずその戦闘力。

子要塞でのデータを見させて貰つたが明らかに手を抜いていたのが分かる。徹底的に防御に徹して相手を攪乱、アーツによる援護や支援による戦場の支配。まずハッキリと言つてそこの学生がしている動きじゃない。1度も攻撃していないのは何か意味があるのか分からないが1度オーレリアが剣を斬られたという。オーレリアの持つ剣は普通の剣じゃない、宝剣アーケディアと言われる名剣なのだ。しかもその一太刀は見えなかつたという。

そうこれが異常なのだ。オーレリアほどの者が見切れない攻撃を出来る時点でもう人間を辞めていると言つてもいいだろう。

そして家族構成。

本人から直接聞いた話ではないが母がいるらしい。それもかなり

腕が立つらしく彼が行っている朝の鍛錬もその母からの言い付けで半ば習慣化したものらしい。そしてⅦ組のアルティナ オライオンが兄と慕っているが血の繋がりはないとのこと。恐らく情報局にいる時に何かがあったのだと思われる。

彼がいた、育った場所は実は予想が付いている。もしそれが当たっているのならば最上級の警戒、最悪の場合この手で彼を始末しなければならぬ。オーレリアが敵わないのだ、ならどれだけ真正面から挑んでも叶うはずもない。だからこそ比較的油断するであろう同じ学生で士官学院生活の中で仕掛ける他ない。

と物騒な方に思考が流れているのに気が付いてハツとなる。時折ミュゼは自分が怖くなる時がある。そんな躊躇いもなく最善な目的の達成の為に人を殺めようと考えている自分が怖い。別にそれを起こすとか起こさないとかそれ以前にそんな事を考えてしまう自分が何よりも怖いのだ。自分が考えている作戦も、今の帝国がどう動くのか予想する自分も。何もかもが怖い。本当なら全て投げ捨てたい。けどそうすればこの世界自体終わってしまうかもしれない。思考を放棄して流されるだけになれるのであればどれだけ楽か。けどそれはミュゼ イーグレットの良心が許さない。見捨てるにしても作戦を遂行するにしてもミュゼという女の子は優し過ぎたのだ。怖い、怖い。自分が怖い。こんな事を考えているのは本当に自分、ミュゼ イーグレットなのだろうか？

いつその事、死んでしまえるのであれば……

「あいたつ。な、何するんですか!？」

「うるせえ。電車来てんのお前がぼーっとしてるからだろ。ほらさっさと行くぞ」

「ちよ……ちよつと!？」

こっつん、と小突かれてミュゼはやっと思考の海から抜け出した。どうやらもう駅のホームへとやって来ていたらしい。

突然手を引かれたものだからバランスを崩し転げかけた所を吸い

込まれるようにカイが手を引き寄せて抱き寄せるようにしてミュゼを受け止めた。ぷしゅー、と音を立てて扉が締まり列車が動き出す。

暖かい。

お風呂の湯船に浸かった時とも違う心の芯から、内側から暖かい何かが溢れてくるように感じる。ああ、心地よい。自然と手が彼の腰へと回されキュツと力が籠る。

「つと、悪いな」

「いえ……出来ればこのままで……」

「馬鹿言っつてんじゃねえよ。さっさと離れ………つち。少しだけだぞ」

どうやら彼にも気を使わせてしまったようだ。こうして彼と触れ合っているうちは自分はミュゼ イーグレットなのだ肯定する事が出来るような気がする。ぽんぽん、と優しく撫でてくれる手も何もかもがじんわりと身体を暖かくしてくれる。そういう所がズルいんです、と心の中で批判するも表情はとても柔らかい。

結局目的地に着くまで彼らは離れることは無かった。

おでかけ2

「カイさん、こっちですよっ！」

「はいはい。分かったから走んじやねえ」

ふむ

「まあっ！とてもいい香りですね。少し寄ってきましようよ！」

「はあ、ったく。しょうがねえな」

ふむふむ

「見てくださいつ！この服、可愛くないですか？」

「まあ……悪くないんじゃない？」

ふむふむふむ

「人集りが凄いですね……えいつ！ふふふっ♪」

「馬鹿てめえ！はなしやがれ！」

ふむふむふむふむ……

すまない。1ついいだろうか。

なんで此奴こんなにゆるふわな顔で笑ってんの？ていうかめっちゃデートっぽくね？俺普通に買い物に來ただけなんだが……

ああ、ポンコツがこの前言ってたな。男女2人で買い物に行ったり遊びに行ったりしてたらそれはもうデートだって。そんではあ母さんと一緒に買い物言ってもデートなのか？って聞いたらすげえ

真つ赤な顔して「そそそつ、そんな訳ありませんわっ!?」って鳩尾殴られたんだっけ。

あれだろうか。ほんと俺の周りの女の人って情緒不安定だよな。特に分校長とか分校長とかオーレリアさんとか黄金の羅刹とか。

そんな事を考えていると腕をぐいつと引つ張られる。馬鹿野郎、おっぱい当たってんだよもつとやれ。俺の見立てならユウナ並みの乳戦力を誇ってやがる。やはり侮れんなミュゼ イーグレット。

「もう、女の子とデート中に他の女の子の事は考えたらいけませんよ？」

ぶーつとぶーたれるミュゼ。あれ？此奴こんなあざと可愛かったっけか。それより俺の母さんとか分校長は果たしてまだ女の子という枠組みに分類される年齢なのであろうか。

とかさつきまで何かすげえ悲痛な顔したり泣きそうになってたくせに今はニコニコしてやがるし。しかもいつもの胡散臭い笑顔じゃなくて素で笑ってるのが分かるからなおタチが悪い。

取り敢えず未だにぶーぶーいつてる豚（ミュゼ）に謝ろう。女の子とのデート中に怒られたらまず最初に謝れってポンコツに言われているからな。ああ、絶対に将来必要になるから練習するぞってポンコツに付き合わされたデートを思い出すぜ。なんかよく分からんが事あるごとに顔真つ赤にして怒るもんだから困ったもんだぜ。

「悪かったな。じゃあ今はお前だけの事を考えてやるよ」

「ふえ？……ばかあ！いきなりなんなんですかっ！」

「あ？お前が他の女の事考えんなって言ったんだろ。俺の買い物無視してお前のを優先してやってるんだから馬鹿とか言われる筋合いはねえと思うんだが」

「それはそうですけど……ううつ、そんなに私をイジメて楽しいですか？そんな事を言われたら私もうよく分からなくなっちゃいます……」

「あー。そりゃ悪かったな」

ガシガシとちよつと乱暴にミュゼの頭を撫でてやる。あつ、しまった。拗ねてるのが余りにもアルティナとかに似てて可愛らしかったからつい。殴られるか?と思つたがふんつとそっぽを向いちまったな。

何だよアルティナとそつくりじゃねえか。可愛いから許す。

「カイさん?」

「あ?.....えっ」

突然後ろから声を掛けられて振り向くと青い髪に鉄道憲兵隊の制服を着込んだ女性、クレアさんがそこにはいた。

「ク、クレアさんっ!」

「ふふっ、お久しぶりですねカイさん。.....それでそちらの方は

？」

「!？」

一瞬物凄い殺気を感じてカイさんの腕を抱き締めるようにギュツと握る。今日の前にいる女性を私は知っている。帝国正規軍 鉄道憲兵隊 通称TMPの特務少佐にして鉄血の子供達。クレア リーヴェルト特務少佐。

先程感じた殺気なんて微塵も感じさせない綺麗な笑顔を浮かべてカイさんに喋りかけるクレア少佐。

「あ、いや……ただの同じツールズ士官学院の学生でミュゼっていいです」

「ミュゼ イーグレットです。お見知りおきを」

「ええ。知っていましたとも、カイさんと貴方はただの同じツールズ士官学院の学生。けれども……今はデート中ですか？」

「えと……そうなるんですかね」

ギシ、と何かが軋む音がした。

「へえ……そうなんですか。カイさんは私に告白しておきながら他の女性にも手を出しているんですね」

「だ、だからコイツとはただの同じ……ってクレアさんそれはもう言わないで下さい！俺も恥ずかしいんつすよ……」

「分かってます、分かってますよ。私は貴方の告白を断りましたからね。今は私と貴方はただの知り合い、けれども……」

チラツとクレアさんが私を見る。何も写さない暗い瞳を私に向けながらニヤツと笑う。

それを見て私は直感的に思った。この女は色々やばいと。

「すみません。お時間をお取りしましたね。では私はこれで失礼しますね」

「いや、こちらこそすみませんお仕事中に」

「全然大丈夫ですよ。それとミュゼさん、でしたか。また会いましょうね」

「っ!?は、はい」

それだけ言って頭を下げるとクレア少佐はその場を去っていった。ふーっと詰まった息を吐いて隣にいるカイさんを見るとぼーっとクレア少佐の事で頭がいっぱいなのかそれとも見惚れていたのかクレア少佐が去っていった方をずっと見ている。何だかそれが全然面白

くなくてくいくいつと袖を引つ張る。

それでも気が付かないものだからガシツと足を踏み付けた。「いてっ!」とやつと気が付いたようで避難するような目で私を見ている。

「やつと気が付きましたか?」

「てめえ……普通にやれよ」

「だって引つ張っても気付いて貰えませんでしたもん。そんなの妬いてしまいますよ」

私には雑に扱う癖にクレア少佐にはあんなにも丁寧に喋りかけて、それに私の事しか考えないって言ったのに違う女性に目を奪われて。そんなの誰だって嫉妬してしまっても可笑しくない。それに何だか彼女の事は好きになれない、私が彼女に感じたとても冷たい感情は今思い出しても身体が震えそうになる。分からない、けど彼女はヤバい。何が、というのは分からないが自分の本能がそう告げている。

「それでクレアさんとはどういう関係なんですか?」

「別に……ただの知り合いだ。一目惚れして焦って告白してフラれたんだ。だせえだろ?」

「そうですね凄くダサイです」

「少しでも気は使えねえのかよ。嘘でも良いからちよつとは慰めてくれるのがいい女ってもんだ、多分」

「もうカイさんなんて知りません」

「ちよ、おい待てよっ!てかなんで怒ってんだよ……女ってこええ……」

もうほつといて帰ってやろうかと思ったが珍しく焦って謝つてくる彼が何処か可愛らしくて許してしまった。

私はいつからこんなにもチョロい女になってしまったのだろうか。それにしてもクレア少佐に関してもつと調べる必要があるそうだ。

くろれきし

その時俺は何も知らないただの世間知らずのガキだった。物心付いた頃から一切ある場所から外に出ないで過ごしてきた。とは言ってもそんな場所でも十分広かったし色んな人がいて色んなことを教えてくれて退屈はしてなかった。

『同類』であるゴーンえんとか呼ばれてるお洒落眼鏡の何でも燃やすマンも何かと気に掛けてくれていたし。お母さん、実際に血の繋がりは無いがそれでも俺に色々な事を教えてくれた。お母さんの部下の3人もそうだ、特にポンコツはやたらと絡んでくるので毎回会うのがめんどかったな。紫髪の我が妹、此方も血の繋がりもないが本当の妹のように可愛かった。何でも燃やすマンと母さん、ポンコツのサンドバッグという名の鍛錬の後の癒しは間違いなく妹だったと言っておく。まあある日を境にいなくなってしまったって物凄くさみしかったなあ、これが兄離れと言うやつなのかと枕を涙で濡らしたものだ。

他にも色んな人達がいるんだが1人1人説明してたらキリがないから特にお世話になった人達を思い出してみたが………1歩間違えば死んでたような鍛錬を思い出して鬱になってきたのでこの辺にしておこう。あつ、今もそんな変わらないな（白目）

まあ取り敢えず俺は世間知らずのただのガキだったのさ。え？何が言いたいのか分からない？まあ待て落ち着け。これから説明してやる。

我が心のオアシスである妹がいなくなって以来俺は割と落ち込んでいる。そんな俺にポンコツが心配して声を掛けてくるんだ。どう思う？お前らの容赦のない剣や槍、炎が俺を苦しめているんだと言えれば楽だったのかも知れない。けれども得体の知れない俺を置いてくれていて尚且つ家族のように扱ってくれている人達にそんな事言える

と思うか？言えないよね、何か母さんとか善意120%でやってると思うし。ポンコツはよく分からん、けど真剣だからそんなこと言えない。

そんなテメエのせいだよと若干非難の目を向けているとポンコツは本を貸してくれたわけだ。そう、しようじよまんがなる本だ。何でこんなん読まなきゃならないんだと半ギレしながら読んだ記憶がある。

まあハマったよね。見事にハマったよね。即落ちとはこのことよ。そこで俺は出会ったんだ。

清楚パンスト巨乳に。

ヤバくね？もう、ヤバくね？（語彙力）
ずきゅんっ!?

つてなつたよね。俺はこれに出会う為にこの世界に生まれ落ちたのだと思つたよ。

そして気が付いたんだ……母さんが清楚で巨乳だということに。え、これもう来てるんじゃない？来てるよね？とその時はめっちゃくちゃテンションが上がっていた。だが聞いて欲しい。俺の母さんは年がら年中鎧を着込んでいる。そうだ、そうなんだ。これじゃ、じやがいものない肉じゃがもいところだ。だから俺は待った。母さんが鎧ではなく普通の服を着るその瞬間を。

だが流石は俺の母さん。鉄壁の守りで鎧を全く脱がない。何かの縛りプレイをしているのだろうか？部下達も鎧着てるけど割と私服なのもたまにだが見るぞ。ご飯の時も鎧、寝る寸前に部屋に突撃しても鎧、朝起きても鎧。そして極めつけはあれだよね。お風呂覗いても鎧だったよね。何言ってるか分からないだっけ？そうだな、俺にも分からない。

あつ、その後ポンコツにバレてプリズムキャリバーを叩き込まれま

した。

あれだ。もうぶった斬ればいいんじゃないかね？と思って意気込んでたある夜の時間に俺の部屋にポンコツがやってきたのだ。期待してるところ悪いが別にそういうのではない。まああれだな、お前何企んでんだって言われた。そりや上司である母さんに何かしようとしてたら部下が出張ってくるわな。俺の母さん大好きっ子のポンコツがこうなったら最後全く折れてくれないので俺は正直に全部話す事にした。

一通り話し終わると軽蔑するような目で見てくると思えば突然赤くなつてわなわなと震えてこう言ってきたんだ。『パンストぐらい……私が履いてあげますわ』そうです、これはマスターを守るためですとか言ってるポンコツをほって俺の脳みそはビッグバンを起こし超回転をした後ガシツとポンコツの肩を掴んで掴んでこう言った。お願いします、と。

こくこくと真っ赤になつたまま首をふるポンコツは何か可愛かつた。ぜつてえ言わないけど。だつてあいつキレるもん。

母さんほどの巨乳ではないがそれでも平均以上で巨乳と言っても差し支えがないプロポーシヨンにアイツはああ見えて割と清楚らしい。俺にはいきなりキレだす情緒不安定な女にしか見えなかったがこの際そういう事におこう。

そして扉が開いて来たかと思つたら声だけが聞こえてきて後ろ向けと言われてそれに従う。なんで、と聞きたかったがここで機嫌を損ねて帰られる方が困るので素直に従つておいた。そして許可がおりてゆっくり振り向くとそこには内股でもじもじしながら上目遣いで此方を見上げるパンスト巨乳ポンコツがそこにいた。

そしてその後の記憶が俺にはない。何か大事な事を忘れてる気がするが……夢のパンスト巨乳清楚を見れたので良しとした。

よし。ここからが本番だ。

え、これが本番じゃないのかつて？馬鹿言え、ポンコツも確かに良かったがそれ以上がいたんだ。

そうその日。俺は何か母さんの上司の命令で外出していたのだ。そう、外出である。この生まれて此方ずっと引きこもりをしていた俺が外出である。やたらと母さんが俺の服を掴んで離してくれなかったが俺はそんなに信用がないのだろうか？そんな外出に浮かれている俺だがいざ外に出るとそのテンションは急激に冷めた。

だって転移したらまた建物の中で建物から出たら駄目って言うんだもん。引越したただけやん、と思った俺は悪くない。

そんな意気消沈してる俺に案内役に妹と同じぐらいの年齢の女の子が付き添ってくれることとなったんだ。もうね、我が妹の事が脳裏に過ぎってこれはもう甘やかすしかねえと思つたわけよ。これでもかつて甘やかした結果すげえ懐かれた。うん、ちよつと無表情だけでも少し表情が変わつたのを見ると凄い嬉しいよね。もうよしよしして抱きしめちまつたよ。

そんな訳で俺の傷付いた心が癒え始めた頃に出会つたんだ。最上級の巨乳清楚に。

パンストこそなかったがそれでも全く着飾っていないというのに溢れる清楚感。歩く度に揺れる纏められた青い髪全てが美しく俺は一瞬で全てを持っていかれた。そして

「あ、あの！パンストを前提に付き合ってください！」

「え、えっ？」

そんな感じで俺の黒歴史は生まれた。パンストがあればパーフェクトだと思いき過ぎていてどうやら言葉に出ていたようだ。まあお茶目なミスだよな、許して欲しい。

お仕事出来ていたらしいクレアさんはめっちゃくちゃ混乱していたが取り敢えず落ち着いた頃に丁寧にお断りされた。うん、まあそりや当たり前だよな。俺もテンパりすぎていきなり告白してしまったよ。俺はしきりに頭を下げて逃げた。かつてないほどに恥ずかしくて逃

げたんだ。笑いたきや笑ってくれ。

そんな感じでまた心が抉れた俺だが思わぬところで俺はクレアさんと再開した。

そう。鉄の男オズボーンさんに呼ばれて部屋に入るとなんとクレアさんもいたんだ。そこで俺達が初対面でない事に気が付いたオズボーンさんが何を血迷ったのか。クレアさんに俺と仲良くしてやれ宣言。そんな上司から言われたら逆らえないですよんオズボーンさん。さすが鉄の男やで。一緒着いていきやす。そんな訳で嫌々クレアさんは上司命令で俺と仲良くしてくれた。凄くお互いぎこちなくてほんと申し訳なかった。けど内心舞い上がったのは言うまでもない。

「んで、俺は突然やってきた母さんの部下に連れ攫われてアルティナとは離れ離れになってクレアさんとは時たま通信するだけの関係になっただよ」

「……お前意外と面白い人生歩んでるじゃねえか」

「ばっかお前黒歴史だからな。まあ今じゃパンスト巨乳清楚至高じゃなくなっただしクレアさんに無礼を働いたあの時の俺を殴ってやりた
い」

「へっ、今でも相当清楚好きなんじゃねえか？つとそういう訳だ、聞きたいことは聞けたか？エセふわ」

「はっ」

「ふっつ、アッシュさんったら意地悪ですね」

説明しよう。アッシュに煽られて黒歴史暴露大会（俺だけ）をしていたらなんか緑の悪魔が扉から出てきやがった。何をいってるか（r

y

「じゃあな。カイ、面白い話ありがとよ」

「ってアツシユてめえ……」

「まあまあカイさん落ち着いて下さい。クレアさんと何をしていたか私もつと詳しく知りたいです♪」

「馬鹿言うな。っておい腕掴むな、ていうか力強いぞ……痛い痛い締まってるからそれっ！」

「ふふっ、それ♪」

「おま、なんで怒ってんだよっ！」

「怒ってませんよ?」

「いや怒って……いたたたっ！」

何かミュゼめっちゃ怒ってんだけど。やっぱり女って怖い。

とくべつえんしゅー

「うふふつ。オズボーン宰相閣下に言われていますから。ええ、私とカイさんの仲ですしこれは仕方がない事です」

「ふふふつ、いえいえ♪クレアさんのような可憐な乙女ではカイさんも落ち着かないでしょうし無理してやらなくてもいいんですよ?」

「お気になさらず。私とカイさんは宰相閣下も認めて頂けた仲ですので何も問題ありません」

「おかしいですね。クレアさんはカイさんからの告白をお断りしたのだと聞いていたのですが?」

「うふふつ」

「ふふふつ」

俺は今ミュゼとクレアさんに足を絡みつかれて添い寝されている。

あ、ミュゼさん今日はニーソなのね。素晴らしいですもつとやれ。

……何かクレアさん腕掴む力強くないですか?痛いっすよ。

ふう……………どうしてこうなった。

こういうのってリイン教官担当なのでは?あの人めっちゃ人気あるし同じ教習であるトワ教官とはすげえ良い感じだし。絶対あれ出ると来てると思う。だってトワ教官の黒タイツ見てたらリイン教官にすげえ良い顔で呼び出しくらったもん。取り敢えずこれから見る時はしっかりと頼み込むようにしよう。きつと俺の視線に邪なモノを感じたに違いない。この誠意ある愛を伝えればきつとリイン教官も許

してくれるはずだ。だってあの人も男だし。

アルティナが一時期リイン教官の補佐をしていたらしいが絶対エロいことさせてるわ。事あるごとにアルティナがリイン教官は不埒ですって言ってるしきつと強要されていたに違いない。

無知で無垢なアルティナ。何も分からず言われた通りにご奉仕するアルティナ……

よし。また後でリイン教官ぶつ殺しとかないと（使命感）

え？そんな事より今の状況を説明しろって？

ああ？そんな事だど!?ぶつ殺すぞ（激おこ）

妹に手を出した奴は教官だろうが皇太子だろうがぶつた斬る。これ絶対ね。お兄ちゃん許しませんよ。分校長……うーあー、うん。きつと分校長はそんな事しないよ。そうに違いない。

分かった分かった。説明するから落ち着け。まあ簡単に説明するとだな。

特別演習に行くからデアフリンガー号に乗って部屋に行くとクレアさんがいてびっくりしてたらミュゼもやってきていつの間にか2人が絡み付いてきたんだ。

ああ、言いたいことは分かる。だがすまない。俺も意味が分からないんだ。クレアさんに掴まれたと思うと絡みつかれてそのままベツドin。そして何故かミュゼも絡み付いてきたんだ。

羨ましい。そう思うだろう？実際色んなおっぱいとかニーハイとか柔らかくていい匂いです（語彙力）

きつと普段の俺なら「アーテガスベツター」とか言ってお触りしていたに違いない。息子も反応してきつとクレアさんに「カイさん？こんなに大きくして……我慢しないでいいんですよ？」とか言われちゃったりして！

いやないな。俺フラれたし。きつとこれも鉄の男さんの上司命令に違いない。鉄の男さんナイスプレイです。けど凄く悲しいのはなんでだろう……

ミュゼ？ああ、コイツ今も顔真つ赤だからきつとえつちいことは出来ないと思う。なんちやつてビッチだから。

こんな幸せ状態なのにやたらと悪寒がするんだ。なんか絶望的なまでに何かを勘違いしていて今この時も何か間違えれば一瞬で命が刈り取られるような……そんな予感が。そりや息子も反応しませんわ。まあある意味助かるんだが。中退はやだし。

「ふふっ♪どうですか？カイさんの為にコレを履いてきたのですが……気に入って貰えましたか？」

「……ノーコメントで」

はい正直撫でくりまわしたくて仕方がないです。そのニーハイに
くい込んだむちつとして生足さすさすしたいです。アーテガス
ベッター

「……!?カイさんったら♪触りたいのなら言ってくださったらいいの
に」

「あ、いや……」

し、しまった。つい自分の意思とは関係なく手が動きやがった。く
そっ!?!このニーハイは化け物かっ!いやほんとにそんな気はなかつ
たんだ。全部ニーハイとこのすべすべした足が悪い。

「……………」

「あの、クレアさん……痛いです」

「あらあら、どうしたんですか？鉄道憲兵隊の制服を着たクレアさん
?」

「……………」

「痛い痛いっ!痛いですって!」

ていうか力強スギイ!真顔になるのだけはほんとまじ勘弁してく

ださい。ふえく美人の真顔とか怖いだけだよ。

「カイ、少しそうだ………すまない。部屋を間違えたみたいだ」

「リイン教官あつてます！部屋あつてますよ！」

何逃げようとしてんだよ。教え子のピンチだぞ助けろよ。それでも灰色の騎士（笑）かよ。

「んんっ！リイン教官？ノックはすべきだと思うんですが……」

「あ、いや……すまない。お前達2人がそういう関係だって言うのは聞き及んでいたんだが配慮が足りなかったな………じゃなくて！その、まだ学生のうちにそういうのは………」

「!?ちがっ、違いますっ！これは……その、とにかく違うんです！」

顔を真っ赤にして言い訳するなんちやってビツチ。そうやって捲し立てるように言い訳するミュゼを横目に離れていったニーハイの名残惜しさに俺は現実逃避する。それはそうと何が違うんですかね？こんな世間知らずの捨て子なんかとそういう関係じゃないからってことか。何それちよつと泣ける。たとえ相手がミュゼでもその言い方は辛い。

「……リインさん」

「あ、え？クレア……さん？どうしてここに？」

ミュゼにも劣らず真っ赤になってぶるぶる震えるクレアさん。え、何この生き物。鉄の男さんこの方貰っていいですか？

「貴方は何も見なかった、いいですね？」

「え？いや……」

「いいですね？」

「あっはい」

そうやってリイン教官に詰め寄って言い訳するクレアさんは可愛かった。というかあんたら2人とも同じ反応するとか実は仲良かったり？

こほん。と咳払いをしてクレアさんは部屋を出ていく。あ、頭ぶつ

けた。以外とドジっ子なのかな？そしてめっちゃ涙目で俺を睨み付けてクレアさんは走り去っていく。俺を悶え死にさせたいのかな？

そしていつの間にかリイン教官と2人きりになった。なんだかすげえ神妙な顔して「お前も苦労してるんだな、俺もよく分かるよ」と遠い目をしたリイン教官に慰められた。解せぬ。

とくべつえんしゅー2

「ははっ、随分なご挨拶じゃねえか」

「ちよ!？」

「なあ。俺がトールズにいるって分かっててやったんだろ？それとも家族って思ってたの……俺だけなのか？」

「っ!？」

新品同然だったデアフリンガー号は所々煤けてあるいは凹みその襲撃の激しさを物語っている。外に無防備な状態で置かれていた機甲兵は破壊されて今も炎を上げていた。

演習1日目の夜。それは突然だった。いきなりデアフリンガー号が揺れけたたましい爆発音が響いた。わけも分からずパニックになりかけた士官学生を教官達が落ち着いてまとめ上げてくれたお陰で阿鼻叫喚になることもなく敵襲へと反応出来たのはいいものの謎の人形兵器によつて更に炎は燃え広がる。

「あははっ！いいねえいいねえ、それだよそれっ！殆ど私と入れ違いで出てっちやっただからねえ。こんな所で出会えるなんて運命感じちやうなあー！」

「シャーリィっ！てめえ！」

「あ、ランディ兄いたんだ。けど今は構ってる暇なんてないんだよね。恋焦がれて貴方に会いたくてもう狂っちやいそうだった。ねえ、貴方もそう思うでしょ！カイ！」

「うるせえ黙れよ、ガサツ赤女。あいにく俺の好みは清楚で気品溢れ

る淑女だ。てめえみたいな頭狂ってる戦闘狂はゴメンだね」

燃え盛る演習地。敵襲はたったの2人と思われたが何処からともなく湧いてくる人形兵器。教官達は学生を指揮しながら応戦する。劣勢になりながらも何とか凌ぎきっているが明らかに達人級以上である2人がまだ何もしていない状態を見るに樂觀視は出来ない。まるで何時でもお前達なんて殺せるのだぞ、そう言っているかのようだった。

燃える炎のせいかそれとも別の何かのせいか頬を朱に染めてうつとりとした目でカイを見詰める赤髪の女の子。

「……はあ。どうせそこのガサツ赤女が暴走したんだろ？ポンコツ」
「……ええ、本来であればここで襲撃する予定はありませんでしたわ」
「色々言いたい事はあるがこの場はそれでいいわ。どうせ遠からず母さんとかも出張ってくるんだろ。んで母さんはなんて言ってたんだ？」

「……『貴方自身の目でこの世界を見て、感じたままに自分の道を行きなさい』とマスターは仰っていましたわ」

「そうかい。何だか誰かの思惑通りに動かされてそれで気に食わないが……俺は俺で俺が此処にいる意味を探させてもらおう」

背後から近付いてくる人形兵器を振り向きもせず一閃する。次いでと言わんばかりに学生達が相手取っている人形兵器の全てを一太刀の上で斬り伏せた。

カイが振り抜いたのは一太刀、そのみで複数の人形兵器を切り捨てるという人間離れした光景に一同それぞれ啞然となる。

「うそっ!？」

「君は一体……」

「想像以上です……」

「驚くのは勝手だがまだまだ湧いてくるぞ、構えろ」

きっとあの人は何時かはこうなるのを分かっていたのだろう。いや、正確には分かっていたいなかったのは自分だけかと自嘲気味にふつと笑う。元より胡散臭い組織だと思っただけかといいたし幾ら自分が世間知らずだったと言っても色々と異常だったというのは気が付く。

超が付くほど真面目で正義という言葉が似合うあの人の事だから何か考えがあるのであるだろうが自分には関係ない事だ。

何故ならあの人は『自分の信じた道を行け』そう言ったのだから自分は此処でトールズ士官学生として刀を振る。それだけなのだ。

カイが言った通りに人形兵器がぞろぞろと湧いてくる。多勢に無税と言わんばかりに出てくる人形兵器に学生達の顔にも疲れと恐怖が見え隠れし始める。良くない傾向だ、何処かが崩ればそれを皮切りに総崩れになりかねない。

教官達も必死に学生を鼓舞し動き回っているが学生達のフォロワーをしながらでベストな動きが出来ていない。このままでは何時かは押し切られるのは目に見えていた。

「教官達は皆のフォロワーを宜しくお願いします」

「けどカイ、君は……」

にたアとやな笑みを浮かべる赤毛の女

「どうやら熱烈なラブコールに対応しなきゃならねえみたいなので。ちよつくら行ってきます」

「カイっ！よせっ！」

赤毛の女が持つ武器、テスト・ロツサが唸りを上げて吠える。テスト・ロツサは火炎放射器が付いたチェーンソーライフルだ。その銃口が向いているのは向いているのは今も必死に人形兵器と戦っている学生達。

放たれる火炎に真正面からカイは突っ込んでそれを斬った。真つ二つに分かれて消えていく火炎を見て赤毛の女、シャーリィ、オルランドは何かに取り憑かれたように笑い出す。

御をする。何故か一向に反撃しようとしないうるカイドが不思議とそんな「殺す気がつての!」「私の子ならまだ行ける筈ですよ?」「しぬっ!これ以上ペースあげたらしぬっ!って母さん自分が楽しんでるでしよ!」なんて気の抜けた会話をしている自分とそう歳が変わらない男の子。

まず鋼の聖女の攻撃をそこまで捌けること自体異常なのだがその時のシャーリイには気が付かなかった。いや普段通りのシャーリイであればそれぐらい一目見れば分かっただろう。

男の子を見た瞬間。自分の心臓がどくん、と跳ねた。一向に収まらない動悸に昼ご飯に毒でも混ぜられてたのかな?なんて何処かズレた思考を張り巡らせながらも視線は男の子にへと吸い込まれてるかのように目を離せなかった。ぼーっと何の気なしに眺めているとこつちの存在に気が付いたのか目が合った。

ドクンツ、さつきよりも激しく強く心臓が跳ねた。咄嗟に視線を外す。顔も熱くて何だか身体も火照ってきた。

シャーリイは普通の女の子とは決定的にズレた感覚の持ち主だ。自分が普通の女の子とはズレてるというのは自分でも理解している。と本人は思っているがある事が関わりがない普段の様子は無邪気で自由な活発な可愛らしい女の子なのだ。猫を追って迷子になる事もあるしこうやって誰かに一目惚れをして恋をする事だってあるのだから。

決定的にズレたシャーリイはとにかく目の前の男の子と話したいし仲良くなりしたい。けれども友達の前作り方すら分からない少女は結局、殺し合うぐらいしか彼に関わり気を引く方法を思いつかなかつた。なんの気もなければ普通に喋りかけるだろうにそれが出来なかったのは恋した乙女ゆえだろう。そんなごく普通の女の子と変わらない事で悩むシャーリイだが。でも少女はそれしか知らないのだから。

「ねえ、何で逃げるの?ねえねえねえねえ!」

「うるせえほんとお前黙れよ。俺煩い女は嫌いって言わなかったっけ？」

「ご、ごめんなさい……」

「え、ええ……」

しゅん、と俯き泣きそうな顔をするシャーリイにこれは予想外と困惑する。初めて会った時もそうだった。いきなり好きだのなんだの言ってきたと思えば死ぬと言わんばかりにチェーンソーを振り下ろしてくるし、嫌いだと真正面から言えばこんな風に泣きそうになる。これが本当に訳が分からないしタチが悪い。これじゃ自分が大事に想っている、構って欲しいけど構って貰えなくて拗ねている妹と何ら変わらないのではないか。

「きつとお前は大事に育てられてきたんだろう、不満もなく幸せなんだと思う」

腰に刺した刀に手を掛ける。

「傭兵要素抜ければお前は何処にでもいる可愛い女の子だもんな、愛されてもいるんだろう」

可愛い。そんな単純な言葉一つで顔色がパアッと明るくなる。それを見て心が軋む音がする。

「けど……お前は俺の好みとは絶望的なまでに掛け離れている。きつと普通の家庭に生まれてきたのならこうはならなかった。だから……お前の心を斬るっ！」

心が軋む音を見無視してカイは刀を振り抜いた。チン、と刀が鞘に収まる音がしたのと同時に糸が切れた人形のようにシャーリイが地面へと倒れる。

「……ふう、斬っちゃったなあ」

別に殺したわけではない。現にシャーリイの腹は上下していて息をしているのは見て取れる。

彼が斬ったのは心だ。恋心、自分に執着している原因であろうそれ

を斬ったのだ。

昔からカイには斬れないものが存在しない。物心付いた頃からそれが出来ていたし、たとえそれが目に見えないようなものでも斬れる。そんな化け物のような力。

「ぐっ!？」

ズキツ、と鋭い痛みが右目に走る。余りの痛みで地面をのたうち回りたくなる衝動を抑えながら右目を抑える。

「あー……ちと視力が持ってかれたか」

昔からそうだった。斬り具合によるがこうして何かを斬る度に身体の何処かが機能不全に陥る。過去に斬ったモノのせいで既に味覚が失われている。どうやら今回は視力が幾分か持ってかれたようだ。

倒れるシャーリーの幸せそうな寝顔に再び心を痛めながらカイはその場を離れていった。